

北川亜友美(キタガワ アユミ)  
平成19年度1次隊 村落開発普及員 ラオス

## プロフィール

滋賀県彦根市出身 学生時代に国際協力を学び、塾講師・大学職員を経て、協力隊参加。  
学生時代に論文調査のため、インドネシアでフィールドワークを経験。その際に、「いつかは傍観者ではなく、現地の人と一緒に働いてみたい」と思ったことが協力隊参加のきっかけです。

## 気候や文化の紹介

ラオスはタイ・ベトナム・カンボジア・ミャンマー・中国に囲まれた東南アジアの小さな内陸国です。日本の本州と同じくらいの国土に人口約600万人。主要産業は農業、国民の大半は仏教徒です。季節は一般的に、暑季(3月～5月)、雨季(6月～10月)、乾季(11月～2月)の3つに分けられます。



## 活動や生活について

首都ビエンチャンから南に900キロ離れたアッタプー県と  
いう県の教育局に配属され、初等教育の質の向上を目標に小学校巡回をしています。主な活動内容は、学校保健活動の一環としての幼稚園・小学校における歯みがき啓蒙活動、 教員のやる気向上を目的とした公開授業の企画・開催、 特別授業として日本語・図工・体を使ったレクリエーション等の授業実施です。

一冊の教科書の仲良く使います

また、学校が長期休暇中は地域のコミュニティスクールで、日本語・英語・体を使ったレクリエーション等の授業も実施しています。

私はアッタプー県に派遣される初めての協力隊員で、赴任当初は県内に他の日本人や他国のボランティアもいない中でどうなるのかと不安に感じることもありましたが、その不安を任地の人々は温かく拭い去ってくれました。町を歩けば、子どもたちが、「サバイディー、クーアユミ(こんにちは、あゆみ先生)」と満面の笑顔で挨拶してくれます。少し運動をしようと思い、夕方にウォーキングをすると、知り合いに必ず出くわし、「どこに行きたいの？送って行ってあげるから乗りなさい」とバイクや車に乗るように勧められます。

そして何より、職場には気心の知れた同僚が沢山いてくれます。上述したような活動が実施できているのも、配属先が私を職場の一員として受け入れてくれ、いつも温かくサポートしてくれているおかげです。特にカウンターパートは私の考えやまだまだ聞くに堪えないであろう私のラオ語を本当に良く理解してくれ、いつも的確なアドバイスとサポートをしてくれます。そしてその他にも活動では接点はありませんが、職場の一員として私を娘や妹のように、可愛がってくれる職員が沢山いてくれます。このような配属先職員の存在は、異国で一人で生活をし、ボランティア活動をしていく上で、私の心の支えになっています。

落ち込むこともあります。けれど、こんなにも大事にしてもらっているのだから、ここに赴任できたこと、そして温かく受け入れてもらったことへの感謝の念として、残りの任期、自分の出来る限りのことを精一杯やろうと気持ちを新たにすることができます。こんな風に感じることでできる配属先に赴任出来て、本当に幸せだと思います。

コープチャイライライ(どうも、ありがとう)、ラオス！



体操の時間  
いつも元気いっぱいの子どもたち



歯みがき啓蒙活動  
視覚教材を使って、まずは歯みがきに興味を。



図工で「カエルのお面」の制作。  
特別授業では日本語・図工・体育を実施しています。



コミュニティスクールでの日本語授業